

令和4年度に発生した蜜蜂の被害

(別表2)

発生時期	発生状況	都道府県が考える原因	実施した対策
令和4年4月下旬	- 被害箱数 2箱 1箱当たりの死虫数 約1,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	現地確認では、外部寄生ダニ等による異常が認められず、被害が発生した時期に半径2km以内にある公園で農薬散布が行われていたが、使用の詳細把握が困難なため、農薬が原因か否かは判断できない。	養蜂協会あてに、被害軽減対策の周知、カメムシ防除情報の提供を実施
令和4年5月上旬	- 被害箱数 50箱 1箱当たりの死虫数 約5,000匹 - 被害規模は巣箱によって異なる(最大規模の被害:10箱/50箱)	被害発生時、周辺で農薬が使用されていた可能性があることから、被害の原因が農薬である可能性は否定できない。	- 被害発生地域のJAと養蜂協会が意見交換会を実施 - 県内のJA及び養蜂協会へ指導文書を発出
令和4年5月上旬	- 被害箱数 40箱 1箱当たりの死虫数 約6,000匹 - 被害規模は巣箱によって異なる(最大規模の被害:10箱/40箱)	被害発生時、周辺で農薬が使用されていた可能性があることから、被害の原因が農薬である可能性は否定できない。	- 被害発生地域のJAと養蜂協会が意見交換会を実施 - 県内のJA及び養蜂協会へ指導文書を発出
令和4年5月上旬	- 被害箱数 13箱 1箱当たりの死虫数 約4,000匹 - 被害規模は巣箱によって異なる(最大規模の被害:2箱/13箱)	被害発生時、周辺で農薬が使用されていた可能性があることから、被害の原因が農薬である可能性は否定できない。	- 被害発生地域のJAと養蜂協会が意見交換会を実施 - 県内のJA及び養蜂協会へ指導文書を発出
令和4年5月上旬	- 被害箱数 30箱 1箱当たりの死虫数 約2,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	被害発生時、周辺で農薬が使用されていた可能性があることから、被害の原因が農薬である可能性は否定できない。	- 被害発生地域のJAと養蜂協会が意見交換会を実施 - 県内のJA及び養蜂協会へ指導文書を発出
令和4年5月中旬	- 被害箱数 30箱 1箱当たりの死虫数 約4,000匹 - 被害規模は巣箱によって異なる(最大規模の被害:10箱/30箱)	被害発生時、周辺で農薬が使用されていた可能性があることから、被害の原因が農薬である可能性は否定できない。	- 被害発生地域のJAと養蜂協会が意見交換会を実施 - 県内のJA及び養蜂協会へ指導文書を発出
令和4年5月中旬	- 被害箱数 21箱 1箱当たりの死虫数 約5,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	被害発生時、周辺で農薬が使用されていた可能性があることから、被害の原因が農薬である可能性は否定できない。	- 被害発生地域のJAと養蜂協会が意見交換会を実施 - 県内のJA及び養蜂協会へ指導文書を発出
令和4年5月中旬	- 被害箱数 20箱 1箱当たりの死虫数 約4,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	被害発生時、周辺で農薬が使用されていた可能性があることから、被害の原因が農薬である可能性は否定できない。	- 被害発生地域のJAと養蜂協会が意見交換会を実施 - 県内のJA及び養蜂協会へ指導文書を発出
令和4年5月中旬	- 被害箱数 1箱 1箱当たりの死虫数 約5,000匹	周辺地域で農薬散布が行われていたことから、農薬の影響による斃死の可能性が高いと考えられる。	関係機関への情報共有の徹底

発生時期	発生状況	都道府県が考える原因	実施した対策
令和4年7月 中旬	- 被害箱数 11箱 1箱当たりの死虫数 約5,000～10,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	被害発生時期に周辺地域で農薬散布が行われており、外部寄生ダニや病原菌が検出されなかったことから、農薬の暴露による斃死の可能性が高いと考えられる。	関係機関・団体への被害軽減対策の再周知
令和4年8月 上旬	- 被害箱数 30箱 1箱当たりの死虫数 約2,000～3,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	周辺ほ場で農薬散布が行われていたことから、農薬への暴露による斃死の可能性が高いと考えられる。	- 地域別協議会を開催し、引き続き情報共有と被害防止に向けた意識の醸成 - 山林や放牧地への避難の実施 - 避難場所のさらなる確保 - 病虫害発生予察情報の養蜂家への情報提供の徹底
令和4年8月 上旬	- 被害箱数 200箱 1箱当たりの死虫数 約1,000匹 - 被害規模は巣箱によって異なる (最大規模の被害:100箱/200箱)	周辺ほ場で農薬散布が行われていたことから、農薬への暴露による斃死の可能性が高いと考えられる。	- 蜜源植物の植え付け、農薬散布時期に敷地内で巣箱を移動し、外勤蜂を減らす対策(養蜂家) - 地域別協議会を開催し、引き続き情報共有と被害防止に向けた意識の醸成 - 山林や放牧地への避難の実施 - 避難場所のさらなる確保 - 病虫害発生予察情報の養蜂家への情報提供の徹底
令和4年8月 上旬	- 被害箱数 15箱 1箱当たりの死虫数 約5,000匹 - 被害規模は巣箱によって異なる (最大規模の被害:2箱/15箱)	被害が発生した時期に半径2km以内にある農地で農薬散布が行われていたが、使用の詳細把握が困難なため、農薬が原因か否かは判断できない。	- 農薬散布期間中は早朝に巣門を閉鎖(養蜂家) - 養蜂協会あてに、被害軽減対策の周知、カメムシ防除情報の提供を実施
令和4年8月 上旬	- 被害箱数 30箱 1箱当たりの死虫数 約4,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	周辺ほ場で農薬散布が行われていたことから、農薬への暴露による斃死の可能性が高いと考えられる。	- 地域別協議会を開催し、引き続き情報共有と被害防止に向けた意識の醸成 - 山林や放牧地への避難の実施 - 避難場所のさらなる確保 - 病虫害発生予察情報の養蜂家への情報提供の徹底
令和4年8月 上旬	- 被害箱数 50箱 1箱当たりの死虫数 約2,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	周辺ほ場で農薬散布が行われていたことから、農薬への暴露による斃死の可能性が高いと考えられる。	- 地域別協議会を開催し、引き続き情報共有と被害防止に向けた意識の醸成 - 山林や放牧地への避難の実施 - 避難場所のさらなる確保 - 病虫害発生予察情報の養蜂家への情報提供の徹底
令和4年8月 上旬	- 被害箱数 50箱 1箱当たりの死虫数 約2,000匹 - 被害規模は全ての巣箱で同程度	周辺ほ場で農薬散布が行われていたことから、農薬への暴露による斃死の可能性が高いと考えられる。	- 地域別協議会を開催し、引き続き情報共有と被害防止に向けた意識の醸成 - 山林や放牧地への避難の実施 - 避難場所のさらなる確保 - 病虫害発生予察情報の養蜂家への情報提供の徹底
令和4年8月 中旬	- 被害箱数 20箱 1箱当たりの死虫数 約3,000匹 - 被害規模は巣箱によって異なる (最大規模の被害:4箱/20箱)	周辺ほ場で農薬散布が行われていたことから、農薬への暴露による斃死の可能性が高いと考えられる。	- 地域別協議会を開催し、引き続き情報共有と被害防止に向けた意識の醸成 - 山林や放牧地への避難の実施 - 避難場所のさらなる確保 - 病虫害発生予察情報の養蜂家への情報提供の徹底
令和4年8月 下旬	- 被害箱数 66箱 1箱当たりの最大死虫数 約500匹 - 被害規模は巣箱によって異なる (最大規模の被害:33箱/66箱)	被害が確認された前日に、水稻のカメムシ防除が実施されており、農薬が原因である可能性が高いと考えられる。	地域内における蜜蜂に影響の少ない水稻用殺虫剤の普及を推進

発生時期	発生状況	都道府県が考える原因	実施した対策
令和4年8月 下旬	・被害箱数 72箱 ・1箱当たりの死虫数 約50～300匹 ・被害規模は全ての巣箱で同程度	・目視調査の結果、外部寄生ダニや蜂病による症状とは異なると推定されたため、原因が農薬である可能性はあるが、断定はできなかった。	・関係機関への被害軽減対策の周知 ・情報共有の徹底
令和4年9月 月上旬	・被害箱数 57箱 ・1箱当たりの死虫数 約500～3,000匹 ・被害規模は巣箱によって異なる (最大規模の被害:4箱/57箱)	・被害発生時には周辺農地は水稻の穂揃期であった。地域の栽培層では、蜜蜂に影響の少ない種類や剤型の農薬を推奨しているが、農薬による暴露の可能性は否定できない。	・関係機関への情報共有の徹底